

高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館

外山

徹

53

御本社周辺の景観



御本社脇の神祠。奥から福德稲荷社、天狗社。

石の階段を登り切り鳥居をくぐると、そこには大本堂前の喧騒に比べると森閑と鎮まった神域の気配濃い堂を目とす。いや、ここは社殿と呼ぶべきだろうか。いよいよ高尾山の本尊たる飯縄大権現を祭祀する地に到達したのである。現在、この建築は飯縄権現堂と呼ばれているが、江戸期の記事においては飯縄権現社であった。高尾山における神仏習合の様相は前号にも触れたが、それについてもう少し仔細に見てゆこうと思う。

御本社脇の神祠

現在、御本社のある平地には向かって左手に鳥居をとまなう神祠がいくつか並ぶの見える。江戸期以前の神仏習合の雰囲気を伝えているとは言え、その変革の嵐の下では多くが変わらざるを得なかったことも間違いない。これらの神祠は比較的近年に再整備されたものであり、江戸期に

おいては全く異なる様相があった。

現在、御本社の左手には天狗社と福德稲荷社が並んでいるが、江戸期にはどうであったか。寛政二年(一七九〇)付の「当山絵図面下書」を見ると、当時においても本社飯縄権現社を取り囲むように小祠が並んでいたことがわかる。本社に向かつてまず左手には拝殿をもつ稲荷社が東向きにあった。その奥の並びには松尾社、さらに摩利支天、天満宮とある。本社反対側には奥から弁才天、愛宕。先年倒木により倒壊したとし、位置は不明であるが八幡・天照太神・春日の三社も記される。稲荷、八幡、天満宮といったよく知られた神々も山上に祀られていたことになる。

ある。

まず、愛宕祠は銅瓦葺き大床造り。五尺に五尺八寸。北向なり。勝軍地藏の木像を安ず。白馬に乗たる貌なり。長一尺二寸ばかり。古しえ北条氏より寄附せし所なりと言ふ。唐銅五重塔とともに北条氏の由緒をもつ社の存在が記される。建坪が一坪に満たない小祠であるが、末社の中では唯一銅瓦の屋根を持つ。愛宕社の総本社は京都の愛宕山に鎮座する愛宕神社。山に鎮座する愛宕神社。火伏の神愛宕権現を祀っていたが、飯縄大権現の利益にも通ずる神である。天満宮は小社杉皮葺き。神体は木の座像にて。長五寸ばかり。天満宮は学問の神様菅原道真を祀るが、関東地方では雷神として各所に祀られている。摩利支天社は、これも社と同じ造作なり。神体は三足の鳥に乗りし木像なり。長一

尺二寸ばかり。摩利支天は武神として武將の崇敬を集めるとともに、山岳信仰の霊場での祭祀も顕著である。松尾社はお酒の神様として知られるが、京都の松尾大社は元來松尾山の磐座を神体とする山岳信仰を起源とする。大きさと同じくして椽葺きなり。覆屋九尺に七尺。神体は白幣なり。太神宮・八幡・春日相殿社もこの頃には再建されていたようだ。松尾社と同じ大きさにして。板葺きなり。上屋は塗籠にて九尺に七尺。三座とも白幣を神体とす。弁天社は社は同じ大きさにて杉皮葺きなり。神体は座像にて長七寸。十五童子の像。長各五寸。と、小さな社殿ながら、わずかに二センチばかりのかわいらしい像が祀られていた。

一位稲荷と号す。南向にて。四尺四方コケラ葺きなり。神体は木の立像にて。長一尺ばかり。前に鳥居をたつ。と社殿は小振りだが、寛政の絵図では拝殿を備えており、「鎮守」という表現からすると、その由来は古そうだ。また一方稲荷神は飯縄大権現の五相合体の一つ吒枳尼天のことでもある。これらの神祠の来歴について史料上は全く不明ながら、こうして見ると山岳修験にまつわるものがあり、修験者の出入りを契機に勧請されたものと解釈することができるとも思えない。さて、明治二年(一八八八)の「什器帳」の図面を見ると、この平地には中央の「飯縄不動堂」以外には「吒枳尼天」とあるだけで、「浅間堂」は現在の奥之院不動堂の裏手の浅間権現の社のことであろう。稲荷社はかろうじて「吒枳尼天」として残ったが、愛宕祠以

下はことごとく神仏分離の結果撤去が余儀なくされたようだ。この「吒枳尼天」は明治三十九年(一九〇六)と推定される「武州高尾山境内全図」に「鎮守社」として引き継がれ、今日に至っている。飯縄権現社と鎮守稲荷社は残つたものの、神仏分離令によって変えられた部分は大きかったことを実感せざるを得ない。

山内各所の神祠

さて、御本社周辺の外の場所についても、かつての神祠の存在を拾ってみよう。「風土記稿」に記された神祠の名を挙げてゆくと、「奥院三社」として「飯縄本地社」「浅間社」「天狗小天狗社」があり、「妙見社」「浅間社」「金毘羅社」「天満社」とある。「奥院三社」についてはまだこれから触れる機会があるので、それ以外について事情を確認してみよう。

して路傍にあり。側に杉一本あり。小社にして覆屋を設く。神体は白幣なり。十一丁目の茶屋よりは一〇九メートルほど手前となると、この「杉一本」はまさに蛸杉ということになるがすでに社の存在は不明である。浅間社は、寺より十四丁を隔てて路の左高き所にあり。神体は白幣なり。石の小社にて前に拝殿を設け。その前に鳥居をたつ。かつては、現在の奥之院背後以外にも浅間社があった。「寺より」という視点なので、蛸杉から約四三六メートルとなるとエコーリフトの乗り場への分岐点の左手の小高い崖上あたりということになるが、二七講にも触れたように、この浅間社のその後も定かではない。金毘羅社は金毘羅台に現在も存続するが、『風土記稿』には、神

体はこれも白幣なり。小社にて覆屋あり。とあまり詳しくはない。天満社は、小社にて白幣を神体とす。東向なり。その所は雨宝弁天の池辺なり。と表参道入口にあり、幕末期近くの『八王子名勝志』の挿絵には清滝脇の池の端に弁天社とともに「天神」が並んでいる。寛政の「当山絵図面下書」には、さらに「清滝社」「雨宝山弁天社」の記載がある。前者は全く現在地不明だが、「雨宝山」は別の記録には「雨宝陵」ともある琵琶滝上流の小峰のことで、『風土記稿』にも「雨宝童子及び弁財天を合祀す」とある。残念ながら雨宝山の位置は今日ではしかとは判別がつかない。明治維新を境に神仏習合時代の様相は確実に変化をしている。おこわり、史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。